

## イチゴ炭疽病、萎黄病の発生に注意しましょう！

気象予報では、8月から10月にかけて平均気温は高くなる見込みです。イチゴ炭疽病、萎黄病は高温多湿でより発生しやすくなります。これら病害の発生に注意し、防除対策を徹底しましょう。両病害に共通する最も重要な防除ポイントは、定植前に苗を厳選し、感染株を本ぼに持ち込まないことです。

### 1 炭疽病

炭疽病は、葉上の黒色小斑点（写真1）、ランナーや葉柄での黒色陥没病斑（写真2、3）、株全体の萎凋症状（写真4）などが特徴です。高温・多湿条件の育苗期に発生しやすく、病斑上に形成された分子子が降雨や水はねによって飛散して伝染します。また、風雨が激しい場合や苗床が冠水した場合に、発生が多くなります。



写真1 葉の黒色小斑点



写真2 葉柄の黒色陥没病斑



写真3 葉柄の黒色陥没病斑



写真4 苗の萎凋症状

### 【炭疽病の防除対策】

- (1) 発病株や感染が疑われる株は見つけしだい取り除き、ほ場外で嫌氣的発酵処理（抜き取った株を穴の空いていない肥料袋等に詰め、水を加える。空気を抜きながら袋の口をしっかき閉じ、日当たりのよい野外に放置する）等により処分する。
- (2) 頭上かん水は控え、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
- (3) 高温多湿は本病の発生を助長するため、夕方には地上部が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調整する。また、株間をできるだけ広げ通風をよくする。

- (4) 症状が出てからの防除は困難なので、表1を参考に発生前からRACコードの異なる薬剤のローテーション散布を行う（[イチゴ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページに掲載中）。
- (5) 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。
- (6) 発病株の周辺の苗は病徴が見られなくても本病に感染している（潜在感染）可能性が高いため、使用しない。

表1 イチゴ炭疽病に登録のある主な薬剤 (令和5(2023)年8月2日現在)

薬剤名	希釈倍率	使用時期	本剤の使用回数	有効成分	有効成分の総使用回数	RACコード
ゲッター水和剤	1000	収穫開始21日前まで	3回以内	チオファネートメチル	4回以内(種子への処理は1回以内、は種後は3回以内)	F:1
				ジェトフェンカルブ	6回以内	F:10
ニマイパー水和剤	1000	収穫前日まで	3回以内	ベノミル	9回以内(種子粉衣は1回以内、苗根部浸漬は1回以内、育苗期の灌注は3回以内、本圃定植後の灌注は1回以内、散布は3回以内)	F:1
				ジェトフェンカルブ	6回以内	F:10
サンリット水和剤	2000倍	収穫前日まで	3回以内	シメコナゾール	3回以内	F:3
ファンタジスタ顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで	3回以内	ピリベンカルブ	3回以内	F:11
セイビアーフロアブル20	1000倍	収穫前日まで	3回以内	フルジオキシニル	3回以内	F:12
キノンドーフロアブル	500~800倍	育苗期	3回以内	有機銅	3回以内	F:M01
コサイド3000	1000倍	-	-	水酸化第二銅	-	F:M01
アントラコール顆粒水和剤	500倍	仮植栽培期	6回以内	プロピネブ	6回以内	F:M03
オーンサイド水和剤80	800倍	収穫開始14日前まで	5回以内	キャプタン	5回以内	F:M04
ベルコートフロアブル	1000倍	育苗期(定植前)	5回以内	イミノクタジナルベシル酸塩	10回以内(育苗期は5回以内、本圃では5回以内)	F:M07
ファンベル顆粒水和剤	1000倍	収穫前日まで	3回以内	イミノクタジナルベシル酸塩	10回以内(育苗期は5回以内、本圃では5回以内)	F:M07
				ピリベンカルブ	3回以内	F:11
タフパール	2000~4000倍	育苗期~収穫前日まで	-	タラロマイセス フラバス	-	F:BM02

※同じ有効成分が含まれる薬剤は、成分の総使用回数に注意すること

## 2 萎黄病

萎黄病は土壤伝染の他、ランナー内の導管を經由して感染します。新葉の奇形、黄化（写真5、6）が特徴的な病徴です。掘りあげると根部が褐変（写真7）し、クラウン部を切断すると導管の褐変（写真8）がみられます。気温25℃以上で発生し、30℃以上になると多発しやすくなるため、高温期の発生が目立つことが多く、乾燥などで根が傷みやすい環境下で発生が助長されます。



写真5 葉の奇形（本ぼ）



写真6 ランナーの症状（本ぼ）



写真7 根部の褐変



写真8 導管の褐変

### 【萎黄病の防除対策】

- (1) 発病してからの防除は困難なので、予防を主体にトップジンM水和剤やベンレート水和剤により防除を行う。また、育苗中の乾湿の差が大きいと根が傷むのでかん水管理に注意する。
- (2) 苗を良く観察し、発病株や感染が疑われる株は見つけしだい取り除き、ほ場外で嫌氣的発酵処理等により処分する。
- (3) 土に含まれる病原菌は資材消毒剤で消毒しても生存する可能性があるため、育苗資材に土がついている場合には、よく洗い、土を除去してから消毒するか、育苗資材を更新する。
- (4) 本ぼで本病が発生した場合は、収穫終了後に土壤消毒を徹底するとともに、消毒後のほ場に未消毒の土が本ぼに混入しないように注意する。畝上げ後消毒が効果的である。

表2 イチゴ萎黄病に登録のある主な薬剤

(令和5(2023)年8月2日現在)

薬剤名	希釈倍率 使用量	使用時期	使用方法	本剤の 使用回数	有効成分	有効成分の 総使用回数	RAC コード
トップジンM水和剤	300~500倍	仮植時及び 仮植栽培期	灌注	3回以内	チオファネートメチル	4回以内(種子への処理 は1回以内、は種後は3 回以内)	F:1
ベンレート水和剤	500倍	育苗期	灌注	3回以内	ベノミル	9回以内(種子粉衣は1 回以内、苗根部浸漬は1 回以内、育苗期の灌注は 3回以内、本圃定植後の 灌注は1回以内、散布は 3回以内)	F:1
クロルピクリン錠剤	1㎡当り10錠		土壌くん蒸<圃場>「1㎡当 り10錠処理」地表面に所 定量を散布処理する。	2回以内(床土1回以 内、圃場1回以内)	クロルピクリン	3回以内(床土1回以 内、圃場2回以内)	I:8B
クロピクフロー	20~30L/10a		耕起整地後、灌水チューブ を設置し、その上からポリ エチレン等で被覆する。そ の後、液肥混合器等を使用 し、本剤を処理用の水に混 入させ処理する。	1回	クロルピクリン	3回以内(床土1回以 内、圃場2回以内)	I:8B

※同じ有効成分が含まれる薬剤は、成分の総使用回数に注意すること

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。



「栃木県農薬危害防止運動」実施中 (6月~8月)

農薬を使用する際は、ラベルを読み上げ、正しく使いましょう。

